

知的障害教育における学力問題を問う！Ⅳ

企画者	半澤嘉博（東京家政大学）
司会者	岩井雄一（元十文字学園女子大学）
話題提供者	日高浩一（東京都立水元特別支援学校） 中西 郁（十文字学園女子大学）
指定討論者	渡邊健治（畿央大学） 丹羽 登（関西学院大学）

KEY WORDS : 生きる力 教科指導 インクルーシブ教育

【企画趣旨】

新学習指導要領でも、生きる力の育成が目指されている。生きる力の育成には、「確かな学力」「健康・体力」「豊かな心」が柱として位置づけられている。過去3回、知的障害教育における学力問題を問うてきたが、今回は、学力問題を生きる力の育成の観点から踏まえ、知的障害教育における生活課題としての「学力」を論じていく。また、新学習指導要領では知的障害教育における教科指導を重視した改訂がなされているが、知的障害教育において曖昧になっている自立活動の指導の在り方や、教科指導等における学力との関係についても論じていく。

【話題提供者の趣旨】

日高浩一氏からは「学力を生活課題から考える」のテーマで話題提供を行う。知的障害教育は、子供たちの自立と社会参加のために必要な「生きる力」を育てることを目指し、そのために「生活課題」を明らかにし、体験的、実際の学びを通じて、自らの生活を主体的、自立的に営むことができるようにする。だから「学習上又は生活上の困難を改善・克服する」自立活動や各教科等の一層の充実が求められる。新学習指導要領では、育成を目指す資質・能力に対して「どのように学ぶか」という点から、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた指導改善を通して「生きる力」を育むことを目指すとされる。これは、子供たちの主体的に学習に取り組む態度を育て、生涯学び続ける力の獲得につながるものとする。学習上又は生活上の困難である「生活課題」への取り組みは、「生きる力」の育成そのものであり、小・中学部段階からのキャリア教育や各教科等における主体的な学びによる改善・充実から「学力」を考えていく。

中西 郁氏からは「自立活動は学力にどのように関係するか」のテーマで話題提供を行う。自立活動は、2009年の学習指導要領の改訂において、その目標を「障害に基づく種々の困難」から「障害による学習上又は生活上の困難」に改め、新たな区分として「人間関係の形成」が加えられた。さらに、2017年の改訂では、自立活動の充実が改訂の柱の一つともなっている。「顕

著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態」に対応するとした自立活動の指導は、知的障害にとって指導内容が分かりにくいことや、「顕著な発達の遅れ」等の指導そのものが知的障害教育の内容であるとの考えもあり戸惑いも多い。知的障害教育における自立活動の指導を、学力を育む指導の観点から捉え、知的障害教育での自立活動の指導の重要性を論じる。

【指定討論者の趣旨】

渡邊健治氏からは以下の趣旨での指定討論を行う。知的障害教育で「学力」を議論すること自体、教育観の大転換である。狭い学力観では議論の余地もないが、「生活課題」と「自立活動」を柱にすることにより、「生きる力」及び「自立」にどのようにアプローチすることが可能になるのか。

丹羽 登氏からは以下の趣旨での指定討論を行う。新学習指導要領等は、育成すべき資質・能力という観点から検討が進められてきた。しかし、障害の多様化が進む中で、障害のある子どもにとっての育成すべき資質・能力についてはイメージしにくい。特に知的障害の子どもは、自閉症、肢体不自由、病弱、ADHDなど複数の障害種を伴うことがある。それなのに知的障害のある子どもというだけで、プリント学習や買い物学習などを中心とした指導が行われている場面に出会うことが多い。例えば、中学校3年生の子どもが、スマートフォンを使って漢字を含む文章を打つことが出来るのに小1の国語のプリントを使っていたり、電卓や表計算ソフトを使っての処理ができるのに小1の算数のプリントを使っていたりする場面を見ると、本当に子どもに適した学習なのかと疑問を感じる。確かに書字や筆算は重要な学習の一つであるが、国語や算数はそれだけを求めているわけではない。一人一人の子どもの障害の状態や特性、可能性を踏まえた上で、必要なツールを活用するなどして、目の前にいる子どもが将来必要とする力を見極めて指導に当たる必要があるのではないか。

(HANZAWA Yoshihiro, IWAI Yuuiti, HIDAKA Kouichi, NAKANISHI Kaoru, WATANABE Kenji, NIWA Noboru)